

毎月、第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことは掲載します。

波というものは、みればみるほど、聞けば聞くほど、不思議な魅力をもっているものである。

寄せては返す波。それはあたかも呼吸のようなリズムである。人間は呼吸というリズムをもっている。大自然には波というリズムがある。してみると、大自然にはそうしたリズムがいろいろの形や音その他で存在するのであり、人間生活にも似たようなリズムがいろいろあるにちがいない。

それは高くなったり、低くなったりということだ。そしてまた、寄せては返す。そうした一定のくりかえしをしながら海水そのものは潮の流れその他で、すこしずつ変わっていつているように、人間生活にも変化があるということだ。

成功したかと思えば失敗する。失敗してそしてまた成功する。なかには成功とか失敗とか大げさにはいえないような、小さな意味の成功と失敗とがくりかえされながら、しだいに人間が成長してゆく。

スランプというのがある。いわば波と波とのあいだの谷間とってよかろう。なにをしてもうまくゆかない。スランプから脱出しようとして、もがけばもがくほどズルズルと深淵にはまりこんでしまう。

3月のテーマ | スランプ

海をたたえる

丸山竹秋



ある夏、私はスランプだった。原稿がどうしても書けないのである。つまらないものならどうにか書ける。しかし、これぞと思うような文章に、どうしても練りあげることができないのだ。

そのころ、たまたま伊豆の白浜に行った。白浜社の宮司さんとは、知りあいだったので、その社務所に泊めてもらって、海岸に出た。

大きな岩が海のなかに突きだして、波がしぶきをあげている。はるか沖には船が小さくみえていたりする。波のうねりを飽かずにながめているうちに、ふと「これだよいのだ」と思った。スランプ状態を肯定することは、なかなかむつかしいのであるが、ふしぎとそんな心になれたのであった。波のうねりの間は低くなる。そして潮は移動してゆく。それでよいではないかといった気持ちになれたのだ。そしてスランプから脱出することができたのである。

またあるときは、津軽海峡の上にあった。陸奥湾から平館海峡をとおって、北海道をのぞむあたりは、四千トンの船も大きく揺れている。凍りつくようなデッキに出て、ふと私は力づよい大自然の意志を身にうけたように感じたのである。

やれっ！ やれっ！ スランプを吹き飛ばせ！ そんな声がかきこえたように思ったのだ。そして私はしだいに快調になってゆく、わが身の爽快さを意識しはじめたのであった。

（著書『よろこんで生きる』より）